

転入高齢者に対する民生委員の関わりの実際と支援のあり方

著者名(日)	工藤 禎子
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
巻	12
ページ	53-60
発行年	2005-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006705/

<資料>

転入高齢者に対する民生委員の関わりの実際と支援のあり方

工藤 禎子*

抄録：転居高齢者の支援のあり方を検討するために、民生委員の転居高齢者への関わりと困ったこと、関わりの工夫、活動に対する思いを明らかにすることを目的とした。民生委員46人へのアンケートと7人のグループインタビューを行い、質的分析を行った。困ったこととして、情報把握が大変、訪問しにくいこと、転入者を阻む地域や組織があることが明らかとなった。転入高齢者に関わる際の工夫として、情報把握の仕方、連携する、関係をつくる、有事に備える、安否を確認する、地域の組織に誘い出し仲間に入れるための具体的な工夫が明らかとなった。活動に対する思いでは、行政から最低限の情報は欲しいこと、誇りを持って地域のために活動したいこと、活動の負担感と限界が明らかとなった。

キーワード：高齢者、転居、民生委員

はじめに

高齢者の転出入は、全国では5年間に約10%といわれ、非高齢層の25%に比べると多くはない¹⁾が、今後の高齢化に伴い関心を集める事項といわれている²⁾。

高齢になってからの転居の影響に関しては、健康状態が良好である場合や本人が転居に関する意思決定をした場合には問題が少ないという報告がみられる³⁻⁴⁾が、健康状態に問題を抱えた状態になり子供との同居・近居のために転居した場合の本人の心身状態の低下や適応上の課題が示唆されている⁵⁾。

介護保険法の改正により今後は地域における介護予防的な活動が求められている⁶⁾。転居高齢者は、物理的にも社会的にも環境が変わることにより、閉じこもりや精神的健康を害するリスクを抱えており、潜在的な介護予防の対象者ととらえることができる。

しかし、現在のところ、明らかな障害を持っている場合以外は、転居高齢者が新たな地域の保健福祉職から特別な支援を得るようなシステムはほとんど見られない。実際には、転居高齢者は、家族と同居・近居の場合には家族からのサポート、独居や高齢夫婦世帯の場合には地域の民生委員や町内会役員からの声かけなどによって、少しずつ地理や周囲の人々のことを理解してゆく状況に

あると考えられる。

これからの高齢社会においては、公的サービスのみならず住民相互の助け合いが理念として掲げられており⁶⁾、地域において「住民の立場に立って、相談に応じ、必要な援助を行い、社会福祉の増進に努める⁷⁾」者と定められている民生委員の活動や役割を、転居高齢者に対する支援の面から明らかにしてみることも必要と考える。転居高齢者の多くは、公的サービスを必要とするような障害をもっているわけではない⁸⁾が、一時的に地域の状況に即した援助が必要な状況にあると考えられる。地域において住民の立場で身近な援助を職務とする民生委員は、実際には、転居高齢者にどのように関わっているのだろうか。

本研究では、転居高齢者の支援のあり方を検討するために、民生委員の転居高齢者への関わり方、中でも転入高齢者のとらえ方、困ったこと、関わりの工夫と民生委員活動についての思いを明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 対象地域と対象者

北海道内都市近郊の人口約2万人のA町である。古くからの市街地に人口約1万人が居住し、5千人は新興住宅地、5千人は農村部という地域である。65歳以上人口

* 地域保健看護学講座

は約4千人、高齢化率は約19%である。

今回の研究では、A町の民生委員（全44地区、委員総数46人）の全員を対象とした。調査期間は2003年1～2月である。

2. 調査・分析方法

1) 民生委員へのアンケート調査

民生委員全員を対象とし、担当地区において、過去1年間に転入してきた高齢者が「いない」「わからない」「いる」で回答を得た。「いる」場合は把握している人数をたずねた。さらに、これまでの活動経験の中で、転入高齢者への関わりで困ったこと、工夫していることを自由に記載してもらった。アンケートの最後に、日を改めての、このテーマに関するインタビューへの協力の可否を尋ねた。分析は自由記載を内容ごとに類似するものを並べカテゴリ化した。

2) グループインタビュー

上記アンケートの中で、過去1年の転入者がみられたのは14地区であり、それらの地区を担当している民生委員7人からインタビューへの参加協力が得られた。

その7人を対象に、2週間後にグループインタビューを行った。調査1週間前に、協力者に文書と口頭で、

- (1) インタビュー時間：平日午後の1時間30分
- (2) インタビュー場所：通常の民生委員が会合を持っている施設の小会議室
- (3) インタビュー内容：①転居高齢者に関わり困ったこと、②転居高齢者への関わりにおける工夫、③民生委員としての思い
- (4) 倫理的配慮：個人情報保護に留意することと、得られたデータは研究以外に用いないこと等を伝えた。

当日のインタビューの進行は筆者が行い、「グループ・インタビューの技法⁹⁾」を参考に、グループとしての結論を出すのではなく、何でもありのままに思ったことを話して頂くこと、テープへの録音と倫理的配慮等について説明し同意を得た。その後、①転居高齢者に関わる中で困ったこと、②転居高齢者への関わりにおける工夫、③民生委員活動について思いの順でインタビューを行った。

分析は、録音したテープから逐語記録を作成し、逐語記録を読み返しながらか、転入高齢者のとらえ方、転入高齢者に関わる中で困ったこと、関わる際の工夫、民生委員活動についての思いに関する表現を抜き出し、内容ごとに類似するものを並べ、カテゴリ化した。

結 果

1. アンケート調査から得られた転入高齢者への関わり

44地区中14地区の民生委員が、担当地区内の転入高齢者を把握していた。14地区の内訳は、新興住宅地域9地区、古くからの市街地4地区、農村部1地区であった。それぞれの地区の転入者数は1～3人であり、把握されていた転入高齢者の総数は25人であった。

転入高齢者への関わりにおいて困ったことと工夫したことは、表1の通りである。困ったことにおいて「情報の不足」が挙げられ、工夫として、様々な情報源に民生委員自らが働きかけて情報を得ていることと援助の糸口をつかむ方法や組織への勧誘について記載されていた。

表1 転入者への関わりにおける困ったことと工夫
—アンケートの自由記載より—

カテゴリー	アンケートへの記載内容例	
困ったこと	情報の不足	情報が遅くなる。 担当地域の住民が、体調が悪く倒れていて、情報がわからず困った。
	援助の糸口がつかめない	しばらく本人に会えないことがある。
	安否確認できない	電気がつかない時に心配。
工夫	自ら情報を集める	自ら出向いて情報を収集する。 公的な情報は、保健福祉部の台帳を見に行く。 住民組織（町内会、老人クラブ）の役員から情報を得る 町内の人（町内会長、民生児童委員、近所）から情報を得る
	援助の糸口をつかむ	家庭訪問（状況把握、緊急連絡先の確認）をする。 町内会福祉部による70歳以上独居者への定期訪問の時に声をかける。
	組織へ勧誘する	組織（町内会・老人クラブ）へ勧誘する。

2. グループインタビューから得られた民生委員の転入高齢者への関わり

グループインタビューに参加した民生委員7人のうち、男性は2名、女性は5名であり、年齢は40歳代から60歳代であった。担当地区は、新興住宅地、市街地、農村部の各地域が含まれていた。

以下の記述では、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを『 』、発言内容例を「 」で表すこととする。

1) 民生委員の転入高齢者のとらえ方（表2）

インタビュー全体を通じて高齢者の様々な行動やそれに対する思いが語られ、【年齢にかかわらず高齢者の強さ】や【構えをみせる】と同時に【高齢者の孤独感】が表現されていた。独居の場合も家族と同居の場合にも、様々な状況における高齢者からの寂しさの訴えがとらえられていた。また、【転入者への期待】として地域やその人々に『仲良く馴染んでほしい』という思いが語られた。

2) 転入高齢者に関わる中で困ったこと（表3）

困ったこととして挙げられたのは【情報把握が大変】と【訪問しにくい】ことが主であった。個人情報保護の

表2 民生委員の転入高齢者のとらえ方

カテゴリー	サブカテゴリー	発言内容例
年齢にかかわらずの高齢者の強さ	積極的、気丈な高齢者	高齢でも活発で積極的な転入高齢者は自分から老人クラブや老人福祉センターに出かける 85歳の気丈な独居転入者に訪問したら、声かけを断られた
	かわいくない高齢者	(町内の人の世話にならないと言う)かわいくない人が入院しても誰も見向きもしない (民生委員訪問を断った人は)人が嫌いなのではなく1回はなめるなどパンチを食らわす
構えを見せる	人嫌いではないが構えを見せる	新しい地域に入ると、構えをみせる、バリアをはる 最初は拒否的でも人嫌いに限らない。2回目からは「入りなさい」と言ってくれる
高齢夫婦が閉じこもり	高齢夫婦が閉じこもり	夫婦で転入してきた男性は外に出ない 妻は夫に気づかって外出を控える
高齢者の孤独感	独居高齢者が訴える寂しさ	夜寂しい、夜が長いという 冬は特に夜が長いという 行事から帰る時「寂しいのが始まる」という。 楽しく過ごした後の反動(寂しさ)が大きいらしい 帰って話し相手がいないのは寂しいと思う
		子供家族と住んでいても寂しい
	人の中での寂しさ	老人福祉センターの高齢者間で縄張りがあり、なじめず寂しい (転入者に対し)皆さんと仲良くなじんで欲しい
	転入者への期待	仲良く馴染んでほしい

表3 民生委員として転入高齢者に関わる中で困ったこと

カテゴリー	サブカテゴリー	発言内容例
情報把握が大変	システム上、情報が入らない	行政から民生委員への住民情報が無い 生活保護受給者は、町内での移動の場合、把握しにくい
	行政・民生委員活動が変化した	以前は町内会長に住民台帳があったが今はないので把握しにくい 以前は町内住民の顔を見に行く用事が多かったが、今はない 以前は健診受診勧奨や高齢者の調査があり、状況をみてくれた
	情報を得にくい地域特性	戸数は少ないが回る範囲が広いので大変 自分の足と、目で見聞きしながら情報集めるべきだが、大変 町内会内の横(班)のつながりがなく、情報把握に時間がかかる
	公営住宅における情報の把握の難しさ	担当地域に団地があると大変 公営住宅は、出入りが多く、把握しにくい 公営住宅で、家賃や人間関係を理由に渡り歩く人がいて把握しにくい 団地への転入者は家族構成も年齢もわからない
	家族が世間体を気にして隠す	娘家族への高齢者の引き取り同居などは、公にしたいくなく、把握が難しい
	見守る必要のある病気の人の情報がなく対応できない	何も情報がないうちに、独居者が急に意識不明になり、救急車で搬送された
訪問しにくい	訪問することに気兼ねがある	あまり頻繁に訪問するのも気が引ける 用事もないのに、そう度々、元気かいと行けるものではない
	偏見により訪問を嫌がられる	昔の人は、民生委員の訪問コール生活保護と思ひ、民生委員を嫌がる
転入者を阻む地域や組織がある	組織の派閥が転入者を拒む	Aセンターの派閥に馴染めない。公共の場で派閥があるのは良くない
	転入者をよそ者扱いする	新人が来て「宜しく」と言ったら、コンコンという。陰口いうのは良くない よそ者が来たなら小さくなってないといけない、そういうのは良くない
困らない	対象者がいない	独居の転入者がいないから困らない
	様子が把握できるので心配ない	月に1~2回、転入者に会う機会があり(様子が把握できており)困らない 全住民の名前や顔がわかる地域なので心配ない
転入高齢者以外の困難	情報が把握しにくい	離婚して実家にいる人など、情報としては伝わってこない 公営住宅は母子家庭など背景に複雑な問題があると、把握しにくい
	生活保護受給者への関わりの困難	一人暮らしの生活保護の若い男の人には訪ねにくい。ドアを開けた瞬間、怒鳴られた 若い生活保護受給者は引け目があるんだろう、警戒心が強い 生活保護受給者の場合、相手側の引け目と、民生委員側の安否確認が合致してない ケースワーカーとの連絡を本人が絶ったところに訪問、タイミングが良くなく、怒鳴られた
		若い生活保護受給者は、病気を持っていることが多いが、見守りくらいしかできない
		精神障害者への関わりの困難
	関わりを拒否した人の死亡	訪問したら役所の世話になりませんと言った人が畑で数日間死んでたことがあった

表4 民生委員として転入高齢者に関わる際の工夫

カテゴリー	サブカテゴリー	発言内容例
情報把握の仕方	自分から動いて情報を集める	町内会や婦人部の会合など色々な所に参加し、近隣の人に変化があったら一言知らせてもらうように、お願いしておく 町内会長、民生委員、町内福祉委員で定期的に打ち合わせをしている 福祉課に来てみると、コンピューターで家族構成等、すぐ分かる
	情報を守る	よほどのことがないと、行政に個人情報を聞きに行くことはない 老人クラブで、事実と異なる情報が流れるので、(防衛のため)話すのは会長だけ 団地では隣近所から情報を得ようとしてはいけない
連携する	町内会の人と連携する	住民は、転入時に町内会長に行くので、町内会長との連携は欠かせない 町内会の福祉委員が月1回、独居高齢者を回って助かる
	行政の担当者と連携する	(拒否的な住民には) 自分だけで抱え込まないで、福祉の方と連絡を取り合うとよい 病気を持っていて見守りが必要な人の電気が何日もつかない時は、行政の担当者と連携取る
関係をつくる	まめに声をかける	見かけた時にまめに近づいていって声をかける 車の中から見かけた時には、降りていって声をかける 担当地域の気になる人に出会ったときは必ず元気ですかと声をかける
	わかるように声をかける	前に会った時と同じ人間だとわかるよう、めがねをはずして声をかける 前に会った時と同じ人間だとわかるよう、はっきり名乗って声をかける 分かってもらえるよう、元気な姿を見るまで何回でも来るとはっきり言う
	話を聞く	拒否的な人の話を聞いた上で、家を空ける時は民生委員に連絡するよう言ったらわかってもらえた
	家庭訪問時の気遣い	近所に聞こえないように、大声でなく、だけど、聞こえるように声をかける 民生委員と言わず、自分の名字を言うようにしている 訪問を断られたら中には入らず、玄関先だけで、お元気かどうか毎月1回来ると言う
	気持ちを伝える	気にかけているという気持ちを伝えることが大事 民生委員を避けている人に、元気な姿を見せないと何回でも来る、倒れたら困るとはっきり言う
		高齢で意固地になっている人に、遠回しでなく、はっきり、まっすぐ何回でも来ると言う
有事に備える	連絡を取りやすくする	プライバシー保護が行き過ぎると、民生委員の活動、特に災害時の互助に支障が出る 町内の独居高齢者宅の電話横に町内会長と民生委員の連絡先を、本人以外の家族やヘルパーがわかるように、大きく書いて貼ってもらっている 独居高齢者の電話横に、受診先を、診療科別に書いて貼ってもらう
	町内会で緊急時の対策を行う	町内会で工夫して、緊急カードを作っている 町内会で、高齢(独居)者の災害等緊急連絡網を作っている
	民生委員として緊急時に備える	担当地域の緊急通報利用者を自分の携帯電話に登録してある 本人から(世帯カード記入事項を)教えてもらう
安否確認をする	対象者を意識する	老人クラブで顔を見ない人に目配せしないといけない
	電気がつかで安否確認をする	(病気がある人の家は) 電気がついていないか、常に気にしてる 節約して電気をつけていない人もいる
	不在の時を把握する	「余計なことだけど長く家を空ける時は民生委員に連絡して」と言ったら、わかってもらえた 高齢者に、入院時や子供宅への外泊時、町内会長か民生委員に連絡するように、はっきり申し合わせた
地域の組織に誘い出し仲間に入れる	仲間に入れる	転居高齢者にすぐ老人クラブに入ってもらった 老人クラブの会長が、家庭訪問して誘い入れる 閉じこもりがちの人に、町内会や老人クラブの集まりに来れるよう声をかけている
	地域の行事に誘い出す	地域の行事(フリーマーケット)に誘うと来てくれる 地域の行事に出て来られない人(老人クラブ非参加者)を行事に誘うと、来てくれる (敬老会とひな祭り)で閉じこもりを防ぐために、会館に送迎した 町内の行事の案内の手紙を楽しみにしている
	直接、声をかける	回覧板だけでは申し込まないので直接声をかける 1件1件回って、行事の声をかける 1度断られても、再度声をかけるべき
	一緒に出かける	転入者が地域のサークルに始めていくとき、委員が一緒に行く
	町内会、老人クラブの会長の力を借りる	会長でちがいが、1件1件声をかける会長はすごい 会長が認識しないと民生委員は町内会役員会からもれることがある 老人クラブ役員に、転入者を名指しで、声をかけてもらうよう頼む
	組織に誘ったら、初めの配慮が大事	新しい人を暖かく見守って欲しい、お世話係が居たらいい 新しい人が(始めわからず)役員に近く座ると、悪く言われる 新しい人の初回参加時はその人を中心に盛り上げる 「入りなさい」ではなく、入った人を、いかに仲間に入れるか (新しい人を盛り上げるのは) 会長が利口だから

表5 民生委員活動に対する思い

カテゴリー	サブカテゴリー	発言内容例
行政から最低限の情報は欲しい	情報がないと活動に支障が出る	身体的に問題がある人の見守りを依頼される場合、事前に情報が欲しい
		プライバシー保護も大切だが、民生委員は住民の転出入の情報を知っておかないと困る
		プライバシーを優先しすぎると、何かあったときに困るのは地域（なので情報は必要）
	民生委員を信用して欲しい	研修で聞いた例のように、担当地域の各世帯の家族構成だけは分かり合っておきたい
誇りを持って地域のために活動したい	地域のために細めに活動する	口外しないので、高齢者や転出入者の名簿が欲しい
		民生委員をもっと信用して欲しい、最低限の情報が欲しい
		行政からの情報が少なくなった分、民生委員が細かく動くべき
	町内の人々と協力して活動する	この町では、民生委員はちょこちょこ回る、都市部からの転入者は驚く
		地域を知らなきゃだめ、町内会単位の清掃でも子供から老人まで、ふれあい
	災害時の地域の福祉に責任を感じる	町内会長と連携をとりながら、地域の見守りをしたい
		町内には福祉委員もいるが、重複してもいいから皆で目を注いでいくのがいい
		災害が起きた時に、どこに誰が居るかわからないと大変なことになる
委員としての誇り	担当地域の緊急通報利用者を自分の携帯電話に登録してある	
	地震の時に、独居者のこと思い出さず、後から胸痛み、反省した、恥ずかしい	
	民生委員ならドアあけるけど、福祉委員（社協から委嘱）ならあけない	
活動の負担感と限界	強迫的な責任を感じる	民生委員は職業ではないが、精一杯がんばってやっている
		情報が無いわりに、何かあったときは「民生委員の責任」といわれる。矛盾している。
		地域で高齢者が孤独死した時に「民生委員はなにをやっている」と言われる事に強迫観念あり
	活動の限界がある	担当地域に生活保護受給者がいると（行政から）安否確認や生活環境をみることをお願いされる
		目が届かないところは仕方がない

流れによる『行政・民生委員活動が変化した』影響や、地域や家族の特性により情報を得にくく、住民のために活動しようとしても情報収集のために労力を割かねばならない状況が語られた。【訪問しにくい】のは、相手を配慮し『訪問することに気兼ねがある』場合と、活動の中での困った体験から『偏見により訪問を嫌がられる』と感じている場合があった。民生委員は転入者に対して地域に馴染んで欲しいと思っても【転入者を阻む地域や組織がある】ことも語られた。また、【困らない】という者もあり、『対象者がいない』場合と『様子を把握できるので心配がない』場合であった。インタビューの中で民生委員は、困難といえば【転入高齢者以外の困難】を語らずにはいられない場面がみられた。民生委員にとって、生活保護受給者等の関わりに困難を覚えたり衝撃を受けた体験が多く、現在のところ、それらの対象者への関わりに比べると、転入高齢者に関わる緊急性や関わる際の困難について語られることは明らかに少なかった。

3) 転入高齢者に関わる際の工夫（表4）

困ったことに表われていた【情報把握が大変】に対応して、実際に行っている工夫でも【情報把握の仕方】が語られ、行政や町内会、近隣から、委員自らが情報を集めていた。また、情報を集めたり安否を確認するために【連携する】ことが語られた。

転入高齢者との【関係をつくる】工夫として『まめに声をかける』『わかるように声をかける』など高齢者の自身の特性に配慮した関わり方が工夫されていた。また、『話を聞く』『家庭訪問時の気遣い』など相手の状況を尊

重した言動が見られる。さらに「倒れたら困る」など民生委員としての責任感を言葉にしたり、「気にかけているという気持ちを伝える」など、相手を思いやるだけではなく委員個人の『気持ちを伝える』ことで双方向性の人間関係を築こうとしている。

【有事に備える】ために、高齢者宅に必要な連絡先を張っておく等の具体的な『連絡を取りやすくする』工夫がみられた。連絡網作成など『町内会で緊急時の対策を行う』ことに加えて、『民生委員として緊急時に備える』ために、「担当地域の緊急通報利用者を自分の携帯電話に登録してある」委員もいた。

民生委員の活動の中で、気になる住民の【安否確認をする】ことは重要な活動ととらえられており、委員それぞれの日常生活の中で『対象者を意識する』『電気がつくかで安否確認をする』『不在の時を把握する』ことが行われていた。

【地域の組織に誘い出し仲間に入れる】ことでは、老人クラブなどの『仲間に入れる』『地域の行事に誘い出す』ことが実践されていた。また、「回覧板だけでは申し込めない」ので、『直接、声をかける』『一緒に出かける』など、転入高齢者と直接かかわるなど、仲間に入りやすくする工夫がされていた。『町内会、老人クラブの会長の力を借りる』『組織に誘ったら、初めの配慮が大事』など、転入者にとって新たに出会うであろう地域や組織の慣習を伝え、排除されないようにする配慮が語られた。

4) 民生委員活動に対する思い（表5）

活動のために【行政から最低限の情報は欲しい】こと

は強調して語られた。個人情報保護の意義は認めながらも『情報がないと活動に支障が出る』ことや『民生委員を信用して欲しい』ことが表現されていた。

民生委員としての経験を積んだ委員からは、『地域のために細めに活動する』『町内の人々と協力して活動する』『災害時の地域の福祉に責任を感じる』『委員としての誇り』が語られ、【誇りを持って地域のために活動したい】という思いにカテゴリー化された。

強い責任感で活動する一方で、自分の担当地域から孤独死などが生じないよう『強迫的な責任を感じる』ことや『活動の限界がある』ジレンマなど、【活動の負担感と限界】が表された。

考 察

転居高齢者の支援のあり方を検討するために、住民の立場から住民の福祉の増進を図る役割を持つ民生委員に対して、転居高齢者にどのように関わっているのかについてアンケートとグループ・インタビューを行った。

民生委員の実際の活動内容¹¹⁾は全国のデータでは「見守り等訪問連絡活動」が全体の4割を占め最も多い。本研究対象の民生委員においても、見守り等訪問連絡はインタビューで語られた内容の中核であった。今回テーマとした転入高齢者に対しても、担当地域の一住民として訪問、声かけ、住まいの様子の観察からの安否確認といった「見守り等訪問連絡活動」が行われていた。

民生委員は、転入高齢者の、積極的・気丈な強い面と、寂しさの両面をとらえており、何とか新たな地域や組織の人々と仲良くして欲しいという期待を持ちながら関わっていることが明らかになった。

民生委員が転入高齢者に関わる際に困ったこととしては、アンケート、インタビューの両方において、情報把握の大変さ、情報の不足が多様に挙げられていた。近年は、個人情報保護法の施行や、コミュニティにおける人と人のつながり方の変化が著しく、民生委員の役割や活動も変化している時期にあるといえる。地域住民の情報を得て、その人々の生活を見守りたいという意識を持つ経験が豊かな民生委員ほど情報が少ないことにジレンマを感じているといえる。民生委員は福祉行政の協力者¹⁰⁾という立場であり、必要に応じて公的な情報も得られるが、システムとして自動的に住民情報が入ってくるわけではなく、担当地域の世帯の全体が把握できないことや、転出入に関しても時機に即した情報は得られないことが活動に不自由をきたすと考えられていた。

民生委員が転入高齢者に関わる際の工夫としては、【情報把握の仕方】【連携する】【関係を作る】【有事に備える】【安否確認をする】【地域の組織に誘い出し仲間に入れ

る】方法の具体例がつぶさに語られた。

民生委員の職務は「1.住民の生活状態を必要に応じ適切に把握しておくこと、2.援助を必要とするものがその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるように生活に関する相談に応じ、助言その他の援助を行うこと、3.援助を必要とする者が福祉サービスを適切に利用するために必要な情報の提供その他の援助を行うこと、4.社会福祉を目的とする事業を経営する者又は社会福祉に関する活動を行う者と密接に連携し、その事業又は活動を支援すること、5.社会福祉法に定める福祉に関する事務所その他の関係行政機関の業務に協力すること、6.その他、必要に応じて、住民の福祉の増進を図るための活動を行う⁷⁾」等、多岐に渡る。今回、工夫として語られた内容は、これらの民生委員の職務に基づくものであると同時に、地域や対象者の特性や経験に基づいた、より実践的な工夫であった。また、【有事に備える】ことは、災害時の地域のネットワークの重要性¹²⁾が意識された内容であり、民生委員としての責任感が表われていた。

また、民生委員は【活動の負担感と限界】も感じていた。民生委員活動が過重であるという問題は長年論議されており¹⁰⁾、民生委員の善意や熱意に頼るだけではない、活動に見合った情報を得られるシステムの検討は、今後の課題と考えられた。

民生委員の転居高齢者に対する支援としては、①個別に転入高齢者の情報を把握すること、②①のために関係機関・組織と連絡を取り合うこと、③必要に応じて、はっきりとわかりやすい言葉で声をかけること、④組織や行事と一緒に出かけるなどの直接的、かつ一歩踏み込んだ関わりが有効であることが示唆された。また、民生委員の支援の姿勢としては、①住民の意思を尊重すること、②さりげなく、しかし、確実に支援するためのアンテナを張っておくこと、③出過ぎず、かつ支援が遅れないようなバランス感覚が重要であると考えられた。

本研究の限界としては、一地域の民生委員を対象とした調査によるものであることと、グループインタビューに参加を同意した民生委員は委員の中でも意識が高く積極的な活動をしている者に偏っていた可能性があり、一般化できないことである。

本研究は、平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究(C)による「高齢者の転居後の生活適応を促すための看護職による早期介入プログラムの開発と効果(研究代表者 工藤禎子)」の一環として行われた。

調査にご協力頂きました皆様に深謝致します。

文 献

1) 藤田峯三：高齢者の人口移動の状況，厚生省の指

- 標, 40 (2): 12-18, 1993
- 2) 田原裕子、岩垂雅子：高齢者はどこへ移動するのか，－高齢者の居住地移動研究の動向と移動流－，東京大学人文地理学研究, 13, 1-53, 1999
 - 3) Schulz, R&Brenner, G：Relocation of the aged：A review and theoretical analysis, J of gerontology, 32 (3):323-333, 1977
 - 4) 安藤孝敏：地域老人における転居の影響に関する研究の動向, 老年社会科学, 16 (1): 59-65, 1994
 - 5) 水野敏子・高崎絹子：子供の近くに転居してきた「呼び寄せ老人」に関する研究, 老年看護学, 3 (1): 79-88, 1998
 - 6) 厚生統計協会：国民衛生の動向, 108-111, 2003
 - 7) 門脇豊子、清水嘉与子、森山弘子：『民生委員法』「看護法令要覧平成17年版」, 755-757, 2005
 - 8) 工藤禎子他：転居高齢者の年齢別にみた生活変化・健康状態・ニーズ, 日本公衆衛生雑誌, 52 (8): 833, 2005
 - 9) S・ヴォーン、J・S・シューム、J・シナグブ著、井下理監訳：グループ・インタビューの技法、慶應義塾大学出版会, 7-167, 2001
 - 10) 井岡勉：『民生委員活動の状況』, 右田紀久恵・井岡勉編著「地域福祉 いま問われているもの」, 306-321, ミネルヴァ書房, 1991
 - 11) 厚生統計協会：国民の福祉の動向, 202-203, 2004
 - 12) 大江裕子・真籠しのぶ：住民や関係機関とともに新しいネットワークの構築をめざして, 特集「災害・被害を受けた住民への支援」, 保健師ジャーナル, 60 (4): 352-358, 2004

The difficulties and coping for relocated elderly in the activity of district welfare commissioners

Yoshiko KUDO*

* Div. of community nursing